

## 10年日本 — 10年アメリカ

オークランド大学心理学部 アソシエイトプロフェッサー

## 宅 香菜子 (たく かなこ)

私は神戸大学に在籍していた3回生の頃、心理学に進もうと決めました。1995年のことです。10年後の2005年に名古屋大学で博士号を取得して、その2ヵ月後に渡米しました。そして今2015年。渡米して10年になります。私にとって節目の年です。日本で心理学を学んだ期間とアメリカでの期間がちょうど10年で、イコールになるからです。

それにしても最初は、自分よりも年上の先生たちに「You」という単語を使うのにさえ抵抗がありました。廊下で先生と会っても礼をしないというのが慣れなくて、動作が不自然で、おどおどしていました。研究会では英語が全く分からなくて、皆の中に入れていけないので、とりあえず録音して後からテープおこしをしていました(研究会中は、とにかく寝ないように手の甲をつねっていました)。

転機は渡米後3年目に来ました。就職が決まったのです。そもそも私は渡米を決めたとき、受け入れ先の大学から「給料はなし。部屋とパソコンは準備できる」と言われていました。そのこともあって、日本の機関から経済的な援助を受けることができるか調べたところ、援助を受けるということは、アメリカで学んだことを日本でいかすということだから、決まった期間が終われば日本に戻ってくるというルールがあることを知りました。私はその頃、自分が博士論文の研究に取り組む中で、海外で行われている研究に対して(生意気にも)いろいろモノを言

いたい気持ちがありました。なので申請はせず、自分で貯めたお金で行くことを選びました。それもあって、客員研究員としての生活は貧乏でした。四畳半より狭い部屋で、トイレ・シャワー共同、お風呂なし。食事に困った日もありました。けれども、そのおかげで研究期間が終わったとき、自分でどこに行きたいかを自由に行きたくことができ、日米両方で就職活動をスタートさせました。

アメリカ心理学会の雑誌から公募を調べ、アメリカ国籍を持っていない人でも応募できるポジションで、常勤、テニユアトラック(採用された数年後に審査を経て終身雇用となる可能性があるもの)を見つけたら、片っ端から応募しました。履歴書に加えて、応募先の大学ごとに3通の文書を準備します。1通目はなぜその大学で働きたいか、なぜそのポジションに自分が合うと思うかについて、2通目はその大学に採用されたらむこう5年くらいでどう研究を進めるつもりでいるか、その大学のどの人とどんな共同研究ができそうかについて、3通目はどんな科目を教えたいか、その学部の先生たちにはなくて自分だからこそできることは何か、その大学の理念に照らし合わせて、どう教育に貢献するつもりがあるかについての手紙です。それぞれ3枚、合計9枚のこれらの手紙を大学ごとに送るのです。振り返ると冷や汗が出るくらいたくさん受けて、たくさん落ちました。が、もうあと2ヵ月で決まらなかつたらビザ



## Profile—宅 香菜子

2005年、名古屋大学大学院教育発達科学研究科修了。博士(心理学)。ノースカロライナ大学心理学部客員研究員を経て、2008年より現職。専門は臨床心理学、比較文化心理学。著書は『悲しみから人が成長するとき:PTG』(風間書房)、『心的外傷後成長ハンドブック』(共監訳、医学書院)など。

が切れるという頃、オークランド大学から面接に呼ばれました。三日間かけての面接では、各教員、学部長、学科長、事務長と会ったり、研究発表や模擬授業をしたりしました。驚いたのは、学生との面接もあったことです。学生からは、「もしうちの大学にきたらどの授業を教えるつもりか。成績はテストのみか。レポートもあるのか」など質問を受けました。

そして、その2週間後に採用が決まりました。これが2008年のことです。それから6年経た去年、テニユアを取りました。上の写真は、大学の写真室で、テニユアの知らせもらった人が一人ずつ呼ばれ、撮ってもらった時のものです。写真家の方は6年前に、新人特集で私を撮ったことを覚えていらっしゃる、6年前は歯を見せてにっこりなんかできないと言っていたのに上手になったもんだねと言われて、自分でも笑ってしまいました。10年後はどんな顔をしているのやら。どこにいても心理学を続けていきたいです。